英文解釈 L01 第 16 講 否定がかかる範囲を読み取る

学習目標

- 否定表現が何を否定し、何を否定していないかを、文の構造と文脈から説明できる。
- 禁止・不要・推量の否定を区別し、述語全体の意味を正確に読み取れる。
- 基本的な部分否定と全否定の違いを理解し、数量や否定の強さを変えずに全文を訳せる。

概念・読み方

構文図の見方

構文図では、S（主語：誰・何について述べるか）、V（述語：動作・状態・判断）、O（目的語：動作の対象）、C（補語：主語や目的語の状態・性質などを説明する部分）、M（修飾語：時・場所・理由などを補う部分）を示す。M は、必ず省略できるという意味ではない。

V の下線は、否定語や助動詞を含めて述語全体の意味を捉えるためのものだ。下線内に never や both などが含まれていても、それらの品詞が動詞になるわけではない。語の品詞と、まとまり全体の文中での役割を区別しよう。

句・節の働きは、名詞のまとまり〈〉、形容詞のまとまり〔〕、副詞のまとまり( )で表す。外側の文の骨格と節の内部構造は別々の図で確認し、元の英文の語順を保ちながら、どの部分が何を説明しているかを読み取ろう。図中の矢印は、代名詞などとその参照先との対応を示す。

1. 否定語を見つけただけでは、文の意味は決まらない

解説

英文に not や never が現れたとき、まず「何が否定されているのか」を考える必要がある。否定語だけを日本語の「〜ない」に置き換えても、その「〜ない」をどこにつなげるかによって、文全体の意味は変わるからだ。

たとえば、次の英文を考えよう。

Rina did not call Ken on Monday.

リナは月曜日にケンに電話しなかった。

この文で否定されているのは、「リナが月曜日にケンに電話した」という内容である。did not は call と結び付き、電話するという動作がその日に起こらなかったことを表す。しかし、この文だけでは、火曜日にも電話しなかったのか、別の日には電話したのかは分からない。

一方、never は、文脈で定まる期間や場面の中で、その動作が一度も起こらなかったことを表す。

Rina never called Ken during the trip.

リナは旅行中、ケンに一度も電話しなかった。

ここでは during the trip が期間を定めている。never は、その旅行中にケンへ電話するという出来事が一度も起こらなかったことを述べており、旅行以外の時期まで否定しているわけではない。

両者の違いは、not と never の日本語訳だけにあるのではない。「どの動作・状態について、どの範囲の事実を否定しているか」にある。

英文を読むときは、主語と述語のまとまりを捉えたうえで、否定表現が打ち消す内容を確かめる。さらに、同じ文に肯定されている別の内容があれば、それを否定に巻き込まないことが重要である。

©ミライコーチング

Rina did not call Ken (on Monday).
S V O M

S “Rina” / 主語
V “did not call” / 否定の述語 / did は助動詞、not は副詞。V 表示は否定語を含む述語のまとまり。否定するのは月曜日の電話という事実で、別日の行動は不明。
O “Ken” / 電話の相手
M “on Monday” / 時

Rina never called Ken (during 〈the trip〉).
S V O M

S “Rina” / 主語
V “never called” / 否定の述語 / never は頻度を表す副詞であり、動詞ではない。V 表示は否定語を含むまとまり。旅行中に電話が一度もなかったという事実を述べ、不可能性は表さない。
O “Ken” / 電話の相手
M “during the trip” / 期間

否定の範囲

否定の範囲とは、否定表現によって成り立たないと示される内容の広がりをいう。

否定表現の位置だけでなく、述語の意味、数量を表す語、時や条件を示すまとまり、前後の文脈を確認して判断する。

2. 禁止と不要は、否定する内容が違う

解説

助動詞を含む文では、否定語の前後にある語をまとめて捉える必要がある。

次の 2 つの英文を比べよう。

You must not enter this room.

あなたはこの部屋に入ってはならない。

You do not have to enter this room.

あなたはこの部屋に入る必要はない。

どちらも enter this room という動作に関係するが、否定しているものは同じではない。

must not は、規則や指示などの文脈では、その行為を禁止する。最初の文で伝えられているのは、「この部屋に入ってはいけない」という禁止である。

これに対して、do not have to は「入る義務がある」という必要性を否定する。後の文は、入室が必須ではないことを述べているのであって、入室という行為自体を禁止しているわけではない。

ここで注意したいのは、「義務がない」ことと「許可されている」ことも別だという点である。do not have to だけでは、実際に入室できるか、入室したかまでは決まらない。

助動詞の意味が変わると、同じ not でも否定の働きが変わる。文の中心となる動詞だけでなく、助動詞を含む述語全体の意味を確かめてから訳すことが必要である。

You must not enter 〈this room〉.
S V O

S “You” / 主語
V “must not enter” / 禁止の述語 / must は助動詞、not は副詞。V は両語を含む述語全体。規則・指示の文脈では入室を禁止する。
O “this room” / 入室の対象

You　do not have to enter　〈this room〉.
S　V　O

S “You” / 主語
V “do not have to enter” / 必要性の否定 / 学校文法上、本図では do not have to enter 全体を V とする。do は助動詞、not は副詞。否定するのは入室の必要性であり、入室は禁止していない。
O “this room” / 入室の対象

ここは覚える

- **must not＋動詞の原形**：規則・指示などの文脈では「～してはならない」という禁止を表す。
- **do not have to＋動詞の原形**：「～する必要はない」という、義務・必要性の否定を表す。

must not を「～する必要がない」と訳したり、do not have to を「～してはならない」と訳したりすると、文の意味が変わってしまう。

解説

cannot や may not も、文脈を確かめて読む必要がある。

cannot は、能力や条件のために「～できない」と述べる場合もあれば、証拠に基づいて「～のはずがない」と判断する場合もある。may not も、規則によって「～することが許されない」という意味と、「～ないかもしれない」という推量の意味を区別しなければならない。

どちらの意味を採るかは、話されている状況による。規則を説明しているのか、能力について述べているのか、それとも手元の情報から出来事の可能性を判断しているのかを見極めよう。

not を使う基本的な否定は英文法 L01 第 009 講の既習事項であり、never の「一度も～ない」という意味は本講で確認した。禁止と不要は第 022 講、助動詞による推量は第 025 講の既習事項である。本講では、これらを完成した英文の意味を読むために活用する。

3. 全体を否定するのか、全体の成立を否定するのか

解説

ここからは、本講で新しく扱う**部分否定と全否定**を学ぶ。

教室に 5 つの席があると想像しよう。「すべての席が埋まっている」という文と、「すべての席が埋まっているわけではない」という文では、伝えられる情報が異なる。

Every seat is occupied.

語注：occupied「（席が）埋まっている・使用中である」

すべての席が埋まっている。

Not every seat is occupied.

すべての席が埋まっているわけではない。

No seats are occupied.

どの席も埋まっていない。

最初の文は、すべての席について「埋まっている」という状態が成り立つと述べている。

2 番目の文は、その全体についての主張を否定する。つまり、少なくとも 1 つは埋まっていない席があるという意味である。すべての席が空いている場合もあるが、この文だけではそこまで断定していない。

3 番目の文では、埋まっている席が 1 つもないと述べている。このように、対象のすべてについてある状態や行為が成り立たないことを表すのが全否定である。

「すべてが成り立つわけではない」という否定と、「どれも成り立たない」という否定を混同すると、英文に書かれていない情報を訳へ加えてしまう。

〈Every seat〉 is occupied .
S V C

S “Every seat” / すべての席 / Every seat 全体が主語。対象となるすべての席について述べる。
V “is” / be 動詞
C “occupied” / 席の状態 / occupied は状態を表す形容詞として扱う。「埋まっている」の意味で、誰かが席を占有した行為は断定しない。

〈Not every seat〉 is occupied .
S V C

S “Not every seat” / 全体への否定 / Not every seat 全体が主語。not は数量表現 every に結び付き、全席が埋まっているという主張を否定する。全席空席でも成立し、埋まっている席の存在は断定しない。
V “is” / be 動詞 / 否定は V 内部ではなく、主語の not every によって表される。
C “occupied” / 席の状態 / occupied は状態を表す形容詞として扱う。「埋まっている」の意味で、誰かが席を占有した行為は断定しない。

〈No seats〉 are occupied .
S V C

S “No seats” / 全否定の主語 / No seats 全体が主語。no は数量を限定し、どの席も埋まっていないことを表す。
V “are” / be 動詞 / 否定は V 内部ではなく、主語の no によって表される。
C “occupied” / 席の状態 / occupied は状態形容詞として扱う。「埋まっている」の意味で、誰かが席を占有した行為は断定しない。

5 つの席で比べる部分否定と全否定

●＝埋まっている席　○＝空席

5 つの席の状態	席の並び	Every seat is occupied.	Not every seat is occupied.	No seats are occupied.
5 席全部が埋まる	● ● ● ● ●	成り立つ	成り立たない	成り立たない
2 席だけ埋まる（混在の一例）	● ● ○ ○ ○	成り立たない	成り立つ	成り立たない
5 席全部が空席	○ ○ ○ ○ ○	成り立たない	成り立つ	成り立つ

見どころ

Not every seat is occupied. は、「5 席すべてが埋まっている」という主張を否定する。そのため、混在している場合だけでなく、5 席全部が空席の場合にも成り立つ。混在行の「2 席だけ」は一例であり、部分否定が表す状態をそこに限定するものではない。

©ミライコーチング

一方、No seats are occupied. は、埋まっている席が 1 つもないという全否定である。両者の違いは、否定する範囲にある。

部分否定と全否定

部分否定とは、all・every・both などが表す全体について、そのすべてにある性質や動作が成り立つという主張を否定する読み方である。

全否定とは、文脈で定められた対象のすべてについて、その性質や動作が成り立たないことを表す読み方である。

基本的な英文では、not all・not every・not both などが部分否定を表し、no・none などが全否定を表すことがある。ただし、否定表現と数量語の組合せを確認したうえで、文脈にも合う解釈を採る。

4. 部分否定から、肯定される数を勝手に決めない

解説

部分否定を理解するとき、特に重要なのは、**英文が否定している範囲と、英文が実際に肯定している内容を分けること**である。

たとえば、Not all the lights are on.は、すべての明かりがついているという状態を否定する。少なくとも 1 つはついていないと分かるが、この文だけで、ついている明かりが存在するとは限らない。

同様に、Not both doors are open.も、2 つのドアが両方とも開いていることを否定する。少なくとも一方は開いていないが、もう一方が開いているとは限らず、両方閉まっている場合も考えられる。

一方で、次のように肯定側の情報が与えられていれば、状況をさらに具体的に読み取れる。

Two of the five lights are on, but not all the lights are on.

5 つの明かりのうち 2 つはついているが、すべてがついているわけではない。

この文では、two of the five lights are on によって 2 つがついていることが明示されている。肯定されている内容と、not all によって否定されている内容を合わせることで、5 つのうち 2 つがつき、残りの 3 つはついていないと判断できる。

つまり、部分否定そのものと、文脈を合わせて初めて分かる事実は区別しなければならない。

なお、数量語と否定語の位置関係によっては複数の読みが成立する英文もある。形だけを見て部分否定だと決め付けず、何を伝える文なのかを前後の内容と照らし合わせることが大切である。

〈Not all 〈the lights〉〉 are on .
S V C

S “Not all the lights” / 部分否定の主語 / not は数量表現 all に結び付き、すべての明かりがついているという主張を否定する。ついている明かりの存在は未確定。
V “are” / be 動詞 / 否定は V 内部ではなく、主語の not all によって表される。not 自体は動詞ではない。
C “on” / 点灯状態 / on は明かりがついている状態を表す補語として扱う。

〈Not 〈both doors〉〉 are open .
S V C

S “Not both doors” / 部分否定の主語 / not は both に結び付き、2 つとも開いているという主張を否定する。片方が開いているとは限らず、両方閉まっていてもよい。
V “are” / be 動詞 / V は are。否定語 not は主語側にあり、動詞ではない。
C “open” / ドアの状態 / open は開いている状態を表す形容詞。

〈Two 〔of 〈the five lights〉〕〉 are on , but 〈not 〈all 〈the lights〉〉〉 are on .
S V C　　S　　V C

S “Two of the five lights” / 前半の主語 / 5 つの明かりのうち 2 つが点灯しているという肯定情報を示す。
V “are” / 前半の be 動詞
C “on” / 点灯状態 / on は明かりがついている状態を表す補語。
S “not all the lights” / 後半の部分否定 / not は all に結び付き、5 つすべてが点灯しているという主張を否定する。点灯している明かりの存在は前半で示されている。but は両内容を対比する。
V “are” / 後半の be 動詞 / V は are。否定語 not は主語側にあり、副詞であって動詞ではない。
C “on” / 点灯状態 / on は前半と同じく点灯状態を表す補語。

注意

部分否定を「一部は必ず肯定される」と覚えるのは正確ではない。

not all・not every・not both から直接分かるのは、「すべてが成り立つ」という主張が否定されていることである。肯定される対象が実際にあるかどうかは、別の情報も確認して判断する。

例題

否定の範囲を、英文の意味につなげる

1

次の英文を読み、問いに答えよ。

Our class did not visit the museum on Friday, but we discussed its paintings in the classroom that afternoon.

語注：discuss「〜について話し合う」／painting「絵画作品」

a. did not が否定している対象と範囲を示せ。

b. 英文全体を、意味関係を保って自然な日本語に訳せ。

解説

a. 構造の確認

did not が否定しているのは、our class を主語とする visit the museum on Friday という動作内容である。

否定されているのは「私たちのクラスが金曜日にその美術館を訪れた」という事実であり、金曜日以外の訪問まで否定しているわけではない。

b. 全文和訳

直訳：私たちのクラスは金曜日にその美術館を訪れなかったが、私たちはその日の午後、教室でその美術館の絵画作品について話し合った。

満点の訳：私たちのクラスは金曜日に美術館へは行かなかったが、その日の午後、教室で美術館の絵画作品について話し合った。

解説

文の中心は、Our class did not visit the museum on Friday と、but 以降の we discussed its paintings in the classroom that afternoon である。

but は 2 つの内容を対比している。前半では美術館への訪問が否定される一方、後半では絵画作品について話し合ったことが肯定されている。

そのため、did not を後半にまで広げて「話し合いもしなかった」と解釈してはいけない。否定の対象を定めたら、接続詞によって結ばれた別の内容が肯定されているのか否定されているのかを確かめると、文全体の意味を保ちやすくなる。

〈Our class〉(S) did not visit (V) 〈the museum〉(O) (on Friday)(M), but we(S) discussed(V)

〈its paintings〉(O) (in 〈the classroom〉)(M) (that afternoon)(M).

S “Our class” / 前半の主語
V “did not visit” / 否定の述語 / did は助動詞、not は副詞。V は否定語を含む述語全体。否定されるのは金曜日の訪問で、別日の訪問は不明。
O “the museum” / 訪問先
M “on Friday” / 訪問の時
S “we” / 後半の主語 / we は前半の our class に対応する。
V “discussed” / 肯定の述語 / but 以降は、実際に話し合ったという肯定された内容。前半の否定はここへ及ばない。
O “its paintings” / 話し合う対象 / its は前半の the museum を指し、その美術館の絵画作品を表す。
M “in the classroom” / 話し合う場所
M “that afternoon” / 話し合う時

2

次の英文を読み、問いに答えよ。

For tomorrow's art lesson, you do not have to bring colored paper because the teacher will prepare enough for everyone.

語注：art lesson「美術の授業」／colored paper「色紙」／prepare「用意する」

a. do not have to が否定している対象と範囲を示せ。

b. 英文全体を、意味関係を保って自然な日本語に訳せ。

解説

a. 構造の確認

do not have to が否定しているのは、bring colored paper という行為を行う必要性である。

「色紙を持ってくる」という行為そのものを禁止しているのではなく、「色紙を持ってくる義務がある」という内容を否定している。

b. 全文和訳

直訳：明日の美術の授業のために、あなたは色紙を持ってくる必要はない。なぜなら、先生が全員のために十分な量を用意するからだ。

満点の訳：明日の美術の授業では、色紙を持参する必要はない。先生が全員分を十分に用意してくれるからだ。

解説

主節の述語は do not have to bring colored paper である。ここでは have to が必要性を表し、do not によってその必要性が否定されている。

because 以降は、そのように述べる理由を説明している。先生が全員分を用意する予定なので、各自が色紙を持ってくる必要はないという関係になる。

ただし、この英文は色紙の持参を明示的に許可しているわけではなく、誰かが実際に持参したかも述べていない。訳では「持ってきてはいけない」「持ってきてもよい」「誰も持ってこない」といった別の意味に変えず、必要性の否定をそのまま保持する。

(For 〈tomorrow's art lesson〉) (M), you (S) do not have to bring (V) 〈colored paper〉 (O)

(because 〈the teacher〉 will prepare 〈enough 〔for everyone〕〉) (M).

M “For tomorrow's art lesson” / 対象となる授業 / 明日の美術の授業について述べる副詞的なまとまり。
S “you” / 主語
V “do not have to bring” / 必要性の否定 / 学校文法上、do not have to bring 全体を V とする。do は助動詞、not は副詞。否定されるのは持参の必要性であり、持参は禁止していない。
O “colored paper” / 持参する物
M “because the teacher will prepare enough for everyone” / 不要である理由 / because 節全体が理由 M。内部は the teacher が S、will prepare が V、enough for everyone が O。enough は十分な量を表し、for everyone はその量が全員分であることを示す。

3

次の英文を読み、問いに答えよ。

Two students answered the question, but not every student answered it.

a. not every student が否定している対象と範囲を示せ。

b. 英文全体を、意味関係を保って自然な日本語に訳せ。

解説

a. 構造の確認

not every student は、すべての生徒がその質問に答えたという内容を否定している。

every student は生徒全員を対象とする表現だが、not によって「全員が答えた」という主張が否定される。少なくとも 1 人は答えていないことになる。

b. 全文和訳

直訳：2 人の生徒がその質問に答えたが、すべての生徒がそれに答えたわけではなかった。

満点の訳：その質問には 2 人の生徒が答えたが、生徒全員が答えたわけではなかった。

解説

前半の Two students answered the question は、2 人が質問に答えたことを明確に述べている。

後半の not every student answered it は、全員が回答したわけではないという部分否定である。主語のまとまりである not every student を、すべての生徒が回答したという主張への否定として読む。

ここで、not every を「誰も〜ない」という全否定にすると、前半の 2 人が答えたという事実と矛盾する。

この文では前半に肯定された事実があるため、回答した生徒と回答しなかった生徒の両方がいると分かる。数量語と否定の結び付きを読み取り、文全体の情報を組み合わせて判断することが重要である。

〈Two students〉 answered 〈the question〉, but 〈not 〈every student〉〉 answered it .
S V O S V O

S “Two students” / 前半の主語 / 2 人の生徒が質問に答えたという肯定情報。
V “answered” / 肯定の述語
O “the question” / 回答の対象
S “not every student” / 部分否定の主語 / not は every に結び付き、全員が答えたという主張を否定する。誰も答えなかったという意味ではない。
V “answered” / 後半の述語 / V は answered。否定語 not は主語側にあり、動詞ではない。
O “it” / 回答の対象 → O “the question” / it は前半の the question を指す。

演習問題

各英文について、a では指定された否定表現が何を否定し、どの範囲にかかっているかを示せ。b では英文全体を、否定の強さや数量・時・条件の関係を保って自然な日本語に訳せ。

1

次の英文を読み、問いに答えよ。

The science club did not use the main hall on Thursday, but it held its meeting in another room that afternoon.

語注：science club「科学部」／main hall「大ホール」／hold a meeting「会議を開く」

a. did not が否定している対象と範囲を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

2

次の英文を読み、問いに答えよ。

During the winter, the volunteer never left the library before closing time, even on days when there were few visitors.

語注：volunteer「ボランティア」／closing time「閉館時刻」／visitor「訪問者・来館者」

a. never が否定している対象と範囲を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

3

次の英文を読み、問いに答えよ。

According to the safety rules, students must not touch the equipment during the experiment while the teacher is away.

語注：according to〜「〜によれば」／safety rule「安全規則」／equipment「器具・設備」／experiment「実験」

a. must not が否定している対象と範囲を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

4

次の英文を読み、問いに答えよ。

The weather report warns of heavy snow, so the mountain road may not be open tomorrow.

語注：warn of〜「〜の危険を知らせる」／heavy snow「大雪」／mountain road「山道」

a. may not が否定している対象と範囲を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

5

次の英文を読み、問いに答えよ。

Of the two printers in the school office, the red one works, but they do not both work.

語注：printer「プリンター」／school office「学校の事務室」

a. do not both work が否定している対象と範囲を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

6

次の英文を読み、問いに答えよ。

None of the three buses stopped at the school gate, although several students were waiting there after their afternoon classes.

語注：school gate「校門」／several「数人の・いくつかの」

a. None of the three buses が否定している対象と範囲を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

演習問題の解答・解説

1

a. 構造の確認

did not が否定しているのは、the science club を主語とする use the main hall on Thursday という動作内容である。

否定の範囲は、科学部が木曜日に大ホールを使用したという事実にかかっている。科学部が会議を開いたことまで否定しているわけではない。

b. 全文和訳

直訳：科学部は木曜日に大ホールを使用しなかったが、その日の午後、別の部屋で会議を開いた。

満点の訳：科学部は木曜日、大ホールを使わず、その日の午後に別の部屋で会議を開いた。

解説

前半の主語は The science club、述語は did not use the main hall である。on Thursday は、大ホールを使用しなかった時を示している。

but 以降では、it が The science club を指し、held its meeting in another room という別の出来事を述べている。こちらは肯定文であり、会議そのものは行われている。

したがって、全体の意味は「大ホールを使用しなかったが、別の部屋で会議を開いた」という対比になる。

did not を「会議をしなかった」と広げると、held its meeting という肯定された内容を失う。否定がかかる述語を確定し、接続詞で結ばれた後半の動作と区別することが読み取りの中心である。

〈The science club〉 did not use 〈the main hall〉 (on Thursday), but it held 〈its meeting〉 (in 〈another room〉) (that afternoon).
S V O M S V O M M

S “The science club” / 前半の主語
V “did not use” / 否定の述語 / did は助動詞、not は副詞。V は否定語を含む述語全体。木曜日の大ホール使用を否定する。
O “the main hall” / 使用する場所
M “on Thursday” / 使用の時
S “it” / 後半の主語 → S “The science club” / it は前半の The science club を指す。
V “held” / 肯定の述語 / held は会議を開いた事実を表す。前半の否定はここに及ばない。
O “its meeting” / 開いた会議 / its は The science club を指す。
M “in another room” / 会議の場所
M “that afternoon” / 会議の時

2

a. 構造の確認

never が否定しているのは、the volunteer が left the library before closing time という行動を取ることである。

その範囲は During the winter によって示された冬の期間であり、閉館時刻より前に図書館を離れることが、その期間中に一度もなかったと述べている。

b. 全文和訳

直訳：その冬の間、来館者が少ない日でさえ、そのボランティアは閉館時刻より前に図書館を離れることが一度もなかった。

満点の訳：そのボランティアは、来館者が少ない日であっても、冬の間は一度も閉館時刻より前に図書館を出なかった。

解説

主語は the volunteer で、中心となる述語は never left the library である。never は動作の発生を否定し、before closing time が「閉館時刻より前」という時間的な条件を示している。

後半の even on days when there were few visitors は、来館者が少なかった日も同じだったことを補足する。when there were few visitors は days を説明する関係節である。

never の否定は、冬の期間における「閉館前の退出」に及ぶのであって、ボランティアが図書館から一度も出なかったという意味ではない。また、春や夏の行動についても、この文からは分からない。

否定表現の強さを考えるときは、何が一度も起こらなかったのかに加え、その判断がどの期間や条件に限られているかを確認する必要がある。

(During 〈the winter〉) [M], 〈the volunteer〉 [S] never left [V] 〈the library〉 [O]

(before 〈closing time〉) [M], (even on 〈days 〔when there were 〈few visitors〉〕〉) [M].

M “During the winter” / 対象期間
S “the volunteer” / 主語
V “never left” / 否定の述語 / never は頻度を表す副詞で、動詞ではない。V は否定語を含むまとまり。冬の間、閉館前の退出が一度もなかったことを表し、不可能性は述べない。
O “the library” / 退出する場所
M “before closing time” / 閉館前
M “even on days when there were few visitors” / 該当する日 / 来館者が少ない日も含む。when 節は days を修飾する。

(During 〈the winter〉) [M], 〈the volunteer〉 [S] never left [V] 〈the library〉 [O]

(before 〈closing time〉) [M], (even on 〈days 〔when [M] there were [V] 〈few visitors〉 [S]〕〉).

M “During the winter” / 冬の間
S “the volunteer” / 主節の主語
V “never left” / 主節の否定 / never は副詞。主節の V に含めて表示し、冬の間の閉館前の退出が一度もなかったことを表す。

O “the library” / 退出する場所
M “before closing time” / 退出時刻の条件
M “when” / 関係副詞 / when は days を修飾する関係節を導き、節内では時を表す。
V “were” / 関係節の述語 / there were は存在構文。there は存在を導く形式要素として扱う。
S “few visitors” / 存在するもの / few visitors を意味上の主語 S として表示する。存在構文には別の構造分析もある。

3

a. 構造の確認

must not が表すのは、students による touch the equipment という行為の禁止である。

禁止の範囲は、during the experiment および while the teacher is away で示された状況にかかる。つまり、実験中に先生が不在である間、器具に触れることが禁じられている。

b. 全文和訳

直訳：安全規則によれば、生徒たちは、先生がいない間、実験中にその器具に触れてはならない。

満点の訳：安全規則では、実験中に先生が不在の間、生徒が器具に触れることは禁止されている。

解説

According to the safety rules が、これから述べる内容の根拠を示している。規則の内容として students must not touch the equipment が続くため、must not は推量ではなく禁止として読む。

during the experiment は「実験中」という時を示し、while the teacher is away は「先生が不在の間」という条件となる状況を示している。どちらも禁止が適用される場面を理解するうえで重要である。

この文を「生徒は器具に触れる必要がない」と訳すと、禁止を不要に変えてしまう。逆に「先生がいる場合は触れてよい」と訳すのも、書かれていない許可を追加することになる。

安全規則という文脈と、must not を含む述語全体を結び付けることで、禁止される行為とその条件を正確に読み取れる。

(According to 〈the safety rules〉) M , students S must not touch V 〈the equipment〉 O

(during 〈the experiment〉) M (while 〈the teacher〉 is away) M .

M “According to the safety rules” / 規則の根拠 / 安全規則に基づく指示であることを示す。
S “students” / 主語
V “must not touch” / 禁止の述語 / must は助動詞、not は副詞。V は両語を含む述語全体。規則の文脈で器具に触れる行為を禁止する。
O “the equipment” / 禁止する行為の対象
M “during the experiment” / 実験中
M “while the teacher is away” / 先生が不在の間 / while 節の内部は the teacher が S、is が V、away が C。先生がいる場合の許可までは述べていない。

4

a. 構造の確認

may not が否定的な可能性を表している対象は、the mountain road が be open tomorrow という状態になることである。

ここでは、明日その山道が通行可能な状態ではないかもしれない、という推量を表す。山道を利用することへの禁止を述べているわけではない。

b. 全文和訳

直訳：天気予報は大雪の危険を知らせているので、その山道は明日通行可能でないかもしれない。

満点の訳：天気予報で大雪への警戒が呼びかけられているため、その山道は明日、通行できないかもしれない。

解説

前半の The weather report warns of heavy snow が、話者の判断の根拠を示している。大雪のおそれがあるという情報を受けて、so 以降で山道の状況を予測している。

後半の主語は the mountain road、述語は may not be open である。may は可能性を表し、not は be open という状態が成り立たない場合を示す。したがって、通行できない可能性があるという意味になる。

may not を「通行してはならない」と訳すと、可能性の判断が禁止に変わってしまう。また、「必ず通行できない」と断定すると、may が表す不確実さを失う。推量の否定では、何が起こらない可能性を述べているのかと、その確かさの程度を両方保つことが大切である。

〈The weather report〉 warns (of 〈heavy snow〉), so 〈the mountain road〉
S V M S

may not be open tomorrow .
V C M

S “The weather report” / 前半の主語
V “warns” / 前半の述語 / warns of で大雪の危険を知らせる。of 以下は warns に結び付く補足部分。
M “of heavy snow” / 警告の内容 / of heavy snow を warns に結び付く M として表示する。
S “the mountain road” / 後半の主語
V “may not be” / 否定的な推量 / may は推量の助動詞、not は副詞。V は両語を含む述語。通行可能でないかもしれないという判断で、禁止ではない。
C “open” / 山道の状態 / open は通行可能な状態を表す補語。
M “tomorrow” / 予測の時 / so は前半の大雪の警告を根拠に、後半の推量へつなぐ。

5

a. 構造の確認

do not both work は、2 台のプリンターが両方とも正常に動くという内容を否定している。

both の対象は the two printers in the school office であり、否定の範囲は、この 2 台すべてについて work という状態が成り立つという主張にかかっている。

b. 全文和訳

直訳：学校の事務室にある 2 台のプリンターのうち、赤い方は動くが、それら 2 台が両方とも動くわけではない。

満点の訳：学校の事務室にある 2 台のプリンターは、赤い方は動くものの、2 台とも使えるわけではない。

解説

文頭の Of the two printers in the school office によって、対象となるプリンターは事務室の 2 台であると分かる。

続く the red one works は、そのうち赤い方のプリンターが動くことを明示している。ここまでは肯定された事実である。

but 以降の they do not both work では、they がその 2 台を指し、not が「両方とも動く」という状態を否定している。

not both だけであれば、少なくとも一方が動かないことは分かるが、もう一方が動くとは限らない。しかし、この英文には the red one works という情報があるため、赤い方は動き、もう一方は動かないと判断できる。

部分否定を読む際は、否定表現から直接分かる内容と、文中の肯定された情報を組み合わせて分かる内容を区別することが重要である。

(Of 〈the two printers 〔in 〈the school office〉〕〉) (M), 〈the red one〉 (S) works (V), but they (S)

do not both work (V).

M “Of the two printers in the school office” / 対象となる 2 台 / 文頭の Of 句は、後続の説明の対象集合を示すため、本図では M として扱う。
S “the red one” / 赤い方
V “works” / 肯定の述語 / 赤いプリンターが動くことを肯定している。
S “they” / 2 台を指す主語 / they は文頭で示された 2 台のプリンターを指す。
V “do not both work” / 両方の成立を否定 / 学校文法上、do not both work 全体を V として表示。do は助動詞、not と both は副詞であり、全語が動詞なのではない。両方とも動くことを否定し、前半の肯定情報からもう一方は動かないと分かる。

6

a. 構造の確認

None of the three buses は、指定された 3 台のバスのどれについても、stopped at the school gate という動作が成り立たなかったことを表している。

対象となる 3 台すべてについて、校門に停車したという事実を否定する全否定である。

b. 全文和訳

直訳：午後の授業の後、数人の生徒がそこで待っていたけれど、その 3 台のバスのどれも校門には停車しなかった。

満点の訳：午後の授業を終えた数人の生徒が校門で待っていたにもかかわらず、3 台のバスはどれも校門に停まらなかった。

解説

文の主語は None of the three buses で、中心となる述語は stopped at the school gate である。

None of the three buses は、指定された 3 台のうち、校門に停車したバスが 1 台もなかったことを示している。この点で、「3 台すべてが停車したわけではない」という部分否定とは異なる。

although 以降は、数人の生徒が待っていたという状況を補足している。although は譲歩を表し、生徒が待っていたという事実と、バスが 1 台も停車しなかったという事実の対比を示す。

after their afternoon classes は、数人の生徒が待っていた時を説明する。their はその生徒たちを指している。

また、否定されているのは 3 台が校門に停車したことなので、ほかの場所に停車したかどうかまでは分からない。

この文では、None of the three buses によって否定の対象全体が明示されている。数量の範囲を確定し、stopped at the school gate という動作と結び付けることで、「3 台のうち何台が停車しなかったのか」を正確に訳せる。

〈None 〔of 〈the three buses〉〕〉 stopped (at 〈the school gate〉),
S V M

(although 〈several students〉 were waiting there (after 〈their afternoon classes〉)).
M

S “None of the three buses” / 全否定の主語 / None of the three buses は、指定された 3 台のどれも校門に停車しなかったことを表す。ほかの場所での停車は不明。
V “stopped” / 主節の述語 / 否定は主語の None によって表される。stopped 自体は否定語を含まない。
M “at the school gate” / 停車する場所
M “although several students were waiting there after their afternoon classes” / 譲歩の副詞節 / although 節全体が主節を修飾する。内部は several students が S、were waiting が V、there が場所 M、after their afternoon classes が時 M。生徒が待っていた事実は否定されない。